
バカな神様と一つの約束

バカ夜空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカな神様と一つの約束

【Nコード】

N3365W

【作者名】

バカ夜空

【あらすじ】

高校生になった新庄^{しんじょう} 翔^{かける}は小学生の頃に両親をなくしていた。

そして毎年のように両親の墓にやってきた翔と、そこで出会った少女との短編物語^{ショートストーリー}。

「お母さんは……？ お父さんは……？」

かすれ声で少年は隣にいる女の人に尋ねていた。

声をかけられたのは五十半ばのおばさんで、悲しげな顔をしている。

「あのね、翔君。難しいかも知れないけど、ここは火葬場って言うて、この世にとどまっている人の身体

をあるべき場所にかえしてあげるところなの。あなたの両親は事故にあって、今日ここで二人の身体をあるべき場所にかえしてあげるのよ」

それは小学二年生には難しいことで、何度も繰り返し尋ねている。

おばさんの隣にいたおじさんが痺れを切らし、少年を怒鳴りつけた。

「お前の両親は死んだんだよ！ だからいくら言っても帰ってこないんだよ！」

少年の目が大きく開かれる。その瞳にはうっすらと涙を浮かべている。

おばさんがなにか言っているが耳には入ってこない。

「お母さんが……お父さんは……死んだ……の？」

その言葉を理解した途端に、少年の顔がグニヤリと歪んで涙が頬を伝った。

その後のことはよく覚えていない。唯一覚えているのはたった一日の出来事。両親の墓に行ったことと、そこで言ったことだけだった。

そこで翔は祈るように、

「神様お願いします。お母さんを……お父さんを生き返らせてください。一人は嫌です。お願いしますよ……神様あ……」

と、最後には泣きながら手をあわせて願った。

すると、誰かが現れて翔の話を真剣に聞いてくれた気もするが記憶にはあまりない。

なにか大事な約束をした気がする。

「君の両親は君をずっと見ているよ。私はその目になってやる」

「じゃあ、僕は――よ。約束だからね」

それは両親が死んだ日から数日後の出来事だった。

「暑いな」

春の気持ちのいい風が終わりを告げる六月十五日、この和泉川市にも夏という暑い時期がおとずれようとしていた。

そんな中、柏木高校に通う新庄 翔は現在自転車で町外れにある古びたスーパーまで来ていた。

今日は翔の両親が事故にあった日で、墓参りに行くためにここで花と、父が大好きだったホットドッグを買いにきたのだ。

早足で買い物を終え、荷物をかごに入れると自転車にまたがり走り出す。ここから両親の墓までそう遠くはなく、翔は自転車をとばして墓まで向かった。

墓はしん、と静まり返っていて人の気配がなく不気味に思えるほどだ。

両親の墓の前まできて、翔は大事なことに気が付いた。ミネラルウォーターを買い忘れたことに。

翔は毎年、墓を洗うための水は水道水ではなくミネラルウォーターを使っていた。それも翔のこだわりである。

「確か近くに自動販売機があったはず……」

そう言つて、知らない人の墓と墓の間を通り、ミネラルウォーターを買うために自動販売機を探しに行った。

（良かった。近くにあった）

自動販売機は入り口にあり、すぐに見つけられたので二百円を入れ、念のため二本購入して墓石の元へ戻った。

水をかけて隅から隅まで綺麗に拭いてあげる。

洗い終わると今度はホットドッグを供えようと思い、隣にあった自転車のかごを見ると、置いていたホットドッグがなくなっていた。つまり、誰かに盗られたということだ。

まだ犯人が近くにいないかと思つて辺りを見回すと、自転車の陰に一人の少女が座り込んでいた。

小刻みに震えてたので『大丈夫か』と、声をかけようとしたが、ピタッと動きを止めた。

なぜなら、彼女の手には食べかけのホットドッグがあり、口元にはケチャップと少量のマスタードがついていた。

「……………」

この少女が犯人だよな？ どうしたらいいんだろう。

返せつて言いたいけど彼女は子供っぽいし食べかけだから、取り返したら俺が怪しくみられそうだ。

（これってなにかの罪で捕まるんだろうか？ 幼児虐待かな？ でもなんもしてない）

翔が彼女の対応に困っていると、彼女はバツと振り向いてきて、左右バラバラな黒と茶色という少し変わった瞳でこちらを覗き込んできた。

「み……みうくらしゃい！」

「みう……？」

よくわからず聞き返してしまつたが、彼女の視線を追つていくと自身の右手にあるものだったので理解することができた。

先ほど買い忘れて、購入したばかりのミネラルウォーターが欲しかったのか。

多分、マスタードが辛かったんだろうな。そんなに熱くなかったし。

優しさ半分、怒り半分の目で睨みながらペットボトルを渡すと、それを一気に半分ほど飲みほした。満タンに入ってたのに。

「ゴホッゴホッ……んっ…はぁ、はぁ」

彼女は一気に飲みすぎたからなのか、盛大に噎せていた。息づかいが……うん、無性にエロい。

そんな光景を見ていたせいか顔がほころんできたので翔は慌てて顔を伏せた。なんか変質者になった気分だ。

しかし、いつまでもこうしているわけにはいけないので、彼女が落ち着いたところで呆れながら尋ねた。

「言いたいことはあるか？」

「ありがとう翔！！ 美味しかったぞ！ ……ってなんで叩くんだ！？」

満面の笑みで言ってきたので、満面の笑みで叩いてやった。

勝手に人のものを食べたんだ。これぐらいはやっていいはず。…多分。

「いくつか質問する」

「叩かれたのに納得がいかないが、私に答えられることならいくらでもいいぞ」

「まず、お前は誰だ？なぜ勝手に俺のホットドッグを食べた？」

すると彼女は何故か頭に疑問視を浮かべて首を傾けた。その後、彼女は腰に手をあてて自信満々に言いはなった。

「私は神様だ！そしてホットドッグは美味しそうだったから食べたんだ」

……彼女はイタイ子なのか？ 一度病院に行った方がいいだろう。自称・神様を名乗る人は大抵、幼児か頭のイタイ子ぐらいだ。

後、勝手にホットドッグを食べた理由がなくてないぞ。

翔は再度呆れながら、自称・神様の彼女を見た。

背の高さは俺より大分低くて、俺が百七十センチだから百四十セ

ンチ前後くらいだろう。

目は左が茶色で右が黒色という左右バラバラの色で、銀色の長い髪の毛は、ゴムでくくってツインテールにしている。

見た目からして歳は中学生かそれ以下か、まあ高校生の俺よりは下だろう。

銀色の髪の毛って染めてるのかな？ この年で普通はありえないよね。まあ、どうせ染めてるんだろうから、さほど驚かないけど。

「そんなにじっくり見ないでくれ。妊娠してしまいそうだよ」

「そんな歳じゃねえだろうが！」

「こう見えても私は高校生と同じ年齢だよ」

「バカな詐欺師かお前は！ どう見ても中学生以下だよ！！」

「そこまで言われると……シヨックを……うえええええん」

突如、自称・神様が泣き出した。

翔は『俺が泣かしたみたいじゃん！』と思い慌てて口を塞ぎ泣き止ませた。

（周囲の目が気になる……）

手を離して回りに人がいないか確認した。おじいさんが一人居たが運良くこちらには気付いてなかったので、ホッとしていると彼女は小声でなにか呟いた。

「おんぶしてくれたら許す……」

翔は仕方がなく言われるがままにおんぶをするとすぐに、にぱあっと笑顔になって、

「どうだ？ 凄いだろ？ 私の演技は」

彼女は翔の背中に乗りながら、えっへん、と無い胸を強調するようには背を仰け反らせた。

「降ろしていいか？」

「また、泣くぞ？」

「それだけはやめろ。洒落にならねえから」

だめだ。こいつと口喧嘩では勝てそうにない。子供並みだが。

そして、おんぶをしたまま墓参りを終わらせた後、彼女の『お前

のお家に行ってやる』という一言で翔は仕方がなくバカな彼女をおんぶしながら自転車を押して家へ帰った。

すでに二人の頭の中からは、ホットドッグの件がきれいさっぱり消えていた。

「お家は中々綺麗にしているな」

「率直な感想ありがとうございます」

ふてぶてしく礼を言くと、『なにかしよう!』と腕にしがみついた。

今はアミの一言で翔はアミと一緒に帰宅していた。

ちなみにアミとは彼女の名前で、帰るときに聞き出した。アミのフルネームはアネミーア・ラテというらしい。

それにしても……くそう。未発達だが一応ある柔らかな胸が……なんとも言えない優しさだ。『これをやるから離れろ』と冷えた麦茶の入ったコップを差し出したら、すぐにパツと手を離れた。

(なんだか惜しいことをしたな……)

胸の中ではそんなことを考えていた。

それからというと、アミが疲れるまで、正確に言えば夜まで遊び相手をさせられ、正直こっちのほうがよく疲れている。

そろそろ夜ご飯を作らないとな。などと考えていると不意にアミが立ち上がり、

「ありがとう。今日は久しぶりに楽しかったぞ。また……また、どこかで会えるといいな」

今にも泣き出しそうな顔をして、アミは家をゆっくりと出ていってしまった。

翔は引き留められなかった。一言伝えれば良かったのに。アミの顔を見ているとなにも言えなくなってしまったのだ。淡々と告げられる言葉を聞くことしかできなかった。

（俺は結局どうなんだろうな……アミとは今日会ったばかりなのになんだろう……懐かしい気分だ）

翔は今日のことを思い出すために目を瞑る。

全て思い出した後、記憶の中のアミに会った部分に疑問がうまれた。

アミは墓にどこから入った？ 確か、墓は俺が入ったところから以外は入れないように出来てある。

俺が墓参りに来たときは誰もいなかったし、小さい墓場だから誰かいたらわかるだろう。

自動販売機は入り口にあるから入ってきたということもわかるが、誰も入って来なかったはず。

（それに俺は自己紹介をしたか？ アミからは聞いたが俺は言っていないぞ……まさか…）

自分の考えをまとめてみると間違えてると思えなくて、気がついたら走り出していた。

「よくここに来たな」

自転車とは違いちよつと時間がかかってしまったがなんとかついた。昼間行った墓地に。

案の定、両親がいる墓の前に探していた女の子は立っていた。

「寒いだろ？ 手短に終わらせるから聞いてくれるか？」

「私は翔の言うことならいつでも、いくらでも聞くぞ」

今までとは違う、優しい声だ。それも昔よく聞いた声。

どんだん確信へと近づいていくなかで翔は尋ねた。

「もしかしたら、という話だ。アミが俺と会った場所は俺の両親が

いる墓地。母さんと同じような声をしている。右目と左目が親父の目と母さんの目に色が同じでどこことなく似ている。それで思ったんだ……」

そこで一息ついて言った。

——お前はあの日俺の話を聞いてくれた神様で、母さん達の生まれ変わりなのか？

するとアミは『わかったんだね』と静かに呟いて目を閉じ、言葉を続けた。

「正確には似せて作った体なんだ。もう変えられないけどね」

苦笑交じりに言ってきたアミを見ていると、翔は心に強い痛みを感じた。それは押し殺しすことができないほど大きなものだ。

「ごめん」

「気にしないでくれ、私がやりたくてやったんだ。後悔はしていない。そんなことより、あの？ トが言ったこと覚えているか？」

「ああ。全て思い出したからな」

二人同時に口を開きあの日の約束を繰り返す。

「「じゃあ、僕はもう泣かないよ。母さん達が見てくれてるからね。大きくなったら、また君に会いに来る。約束だからね」」

二人の声が重なって、覚えていてくれた事に二人とも涙を流している。

「約束…破っちゃったな。……だからさ、今日この場所でまた新しい約束をしないか？」

「……約…束？」

アミが消えてしまいそうな声で聞き返すと翔は笑顔で口にした。「今日からは俺も母さん達を見る。今まで見てもらった分よりもっともっと見る。だからアミ、俺と……いや、僕と、ずっと一緒にい

よう」

「うん……、うん！」

そして、二人は指切りをした。翔とアミからの瞳からはもう涙が消えていて、その目は夜の空の中で光輝く星のようだ。

その後、翔は両親の墓に手をあわせて誓った。

もう一度交わした約束は一生破らないし、一生大事にする。
バカな神様と一つの約束は。

(後書き)

初めての投稿なのでやりかたがわからなかったですー…

厳しい意見を待っていますー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3365w/>

バカな神様と一つの約束

2011年9月6日03時25分発行